



京都の民主運動史を語る会機関誌 題字 住谷悦治

会代表 天野和夫  
同副代表 奥田修三

会費・誌代とも年3,000円

[郵便振替払込]

口座番号 01060-7-15762

加入者名 燎原社

戦後五〇年 満蒙開拓義勇軍を語る (二)

谷口茂雄

山宣の柩をかついで (二)

戎谷春松

青い地球のヒューマニズム

沢村秀夫



賀茂の河原 永原 誠

随筆

青い地球のヒューマニズム

沢村秀夫

1 変身

さあ、あれは二十川さんの第一回か第二回目の知事選挙の時のことでした。

選挙投票日の前日、宮津市の中心街―本町通りと白柏通りの電柱全部に、堅長一メートルぐらいのポスターが、ベタ貼りに貼り出されました

文面は『赤い知事を出すな』と赤刷りです。これはこのままほおては置けないと、当時、共産党の丹後地区に来ていたU氏と相談し、二人で、夜更け、墨汁と筆を持って出かけ、片っぱしから『赤い知事を出すな』の最後の「な」を、墨汁で消していった。

本町通りを了わって、白柏通りにさしかかった時、夜警の刑事が二人現れた。  
電柱にポスターを貼るのは法

律違反だ』と抗議し、そこまでにして中止して帰った。

翌日の投票日には、『赤い知事を出す』というポスターが、本町通りの電柱全部を占領した。  
二十川氏は堂々当選した。

2 新樹

朝鮮戦争のため、新聞「労働者」発行停止となり弾圧、再び不当拘留さる

読書許さず古き座禅を武器に闘う  
檻暗く、金網の鶏屋とやに陽を吸ふのみ

さきの「平和のこえ」証人調べのため、とて、京都より宮津へ移監さる  
手錠して故郷の土を踏めというのか

手錠恥じず昂然たるもの自らおのずか

法廷に妻ら傍聴  
いとし妻少しやつれて頬笑めり

傍聴の同志と握手 手錠のまま

宮津刑務所

ふるさとの八幡山を鉄窓に

日曆をここにも刻み五号独房

即日再び京都へ移送さる

車中

あざみ、つばな、すいばの花も目に優しやさ

麦は黄に夕日の新樹移りゆく

ささやかな流れ、新樹の群れに沿う

京都拘留所にて  
用便苦 吉田打倒を腸はらに

獄床に追わる、夢を見て覚めぬ

緋のつゝじわが闘魂を培つちかえり

ダンテを読みエス語を習えば獄を忘る

3 加賀の千代女と与謝蕪村のヒューマニズム

朝顔に釣瓶とられてもらい水  
有名な加賀千代女の俳句である。

誇張的だとしてあまり高く評価されてはいないようだが、女性のやさしいヒューマニズムの表現として、再評価されるのではなからうか。

とんぼ釣けふはどこまで行ったやら

起きて見つ寝て見つ蚊帳の広さ哉

これらは千代女の句として伝えられているが当時のヒューマニズム俳句が自然に、大きな星が小さな星を、吸収するように、千代女の句とされて、広く評価されたようである。

少し時代が下って、与謝蕪村の句は、凜然としてヒューマニズムの清香を放っている。  
梅おちこち南すべく北すべく

蕪村

蕪村の母は、丹後の僻村のそのまた最下層の農氏の出身であった。蕪村は俳諧、俳画の庶民性、階級を超えたそのヒューマニズム精神を愛した。その俳画もまた清新。人間性ゆたかである。

蕪村は、春をさきがける梅をこよなく愛し、前記の句も「南すべく北すべく」に、蕪村の胸の高鳴り、花信を寄せた俳友への心のおどり、そのヒューマニズムを感受できる。

牡丹散って打ち重なりぬ二三片

絢爛とした満開の牡丹も勿論よいが、花了えて散り重なった花卉の風情も愛惜せらる。牡丹の生命の終わりまで愛する蕪村の心のやさしさ。

心天さかしまに銀河三千尺

蕪村

芭蕉の句に

荒海や佐渡に横たふ天の川がある。芭蕉は俳句に高雅・深遠を求めたようだが、蕪村は芭蕉を尊重しつつも、俳句本来の庶民性・人間性、ヒューマニズムを追求した。

以下蕪村の人間俳句の一部

お手打ちの夫婦なりしを衣替

え

討はたす梵唄つれ立て夏野かな

去られたる身を踏込んで田植

哉

夕立や足のはえたる空俵

重荷もち丁身を泣夏野哉

負まじき角力を寝ものがたり哉

棒突て庄屋を見舞ふ野分哉

こちよりもお寺大事の野分哉

実に、それぞれが近代短篇小説

を読むようである。

底のない桶こけ歩く野分哉

などは、映画的でさえある。

磯ちどり足をぬらして遊びけ

り

羽織着て網もきく夜や河ちど

り

しみじみとした人間的愛情が美

しい。

以下の句も人間味にあふれている。

こがらしや何に世わたる家五

軒

苦にならぬ借金負ふて冬籠

宿かさぬ燈影や雪の家つゞき

春雨や人住みてけぶり壁を洩

る

ことしより蚕はじめぬ小百姓

次のような清新・清純な句もある

落穂拾い陽当る方へ移りゆく

月天心貧しき市を通りけり

大徳の糞ひりおわす枯野哉

岩倉の狂女恋せよほととぎす

○

蕪村のヒューマニズムは、その

絵画に於てまた顕著で、宝暦の頃、

宮津滞留中の作「三俳僧図」、「静

舞図」、「晩秋飛鴉図」、「雨柳群鴉図」、などに早くも明らかである。

なお晩年の俳詩「春風馬堤曲」

は、一篇のヒューマニズム映画を

目のあたりにする思いがある。

(さわむら・ひでお)

宮津市在住 九五歳)

◆会員短信◆

○会へのお便りを御紹介します。

九七年度会費としてお支払いし

ます。戎谷氏の「山宣の柩をかつ

いで」の文、宇治市議会の皆さん

にもお伝えします。こちらでは六

月二〇日、今年の山宣墓前祭を行

います。こちらへもぜひおいで下

さい。 宇治市 足立 恭子

天野先生より御案内いただきま

した。がんばって加入させていた

だきます。

先日、湯浅さんが亡くなら

れて、本当に残念な思いです。

これを機会に層のあつい、京

都の民主運動史にふれてみた

と思います。よろしく御指

導下さい。

右京区 藤原 冬樹

面識はありませんが湯浅貞夫氏

御逝去と聞き深い哀悼の意を表し

ます。戦前戦中の民主運動家が

次々となくなれば残念至極です。

小生も七八才そろそろです。ズボ

ラで会費失念の分を含め一万三〇

〇〇円お送ります。

山科区 武藤 太郎



# 山宣の柩をかついで

## 人民解放の道ひとすじに(二)

戎谷春松

○前号記載の戎谷氏「山宣の柩をかついで(一)」は、編集の不手ぎわで大幅の脱落となりました。この号であらためて全部を収録させて頂いた次第です。戎谷氏および読者の皆さんにおわび申し上げます、おゆるしねがいます。

うち振られる赤旗と革命歌におくられ火葬場に運ばれていきました。

山宣は、二八年一〇月七日台湾のキールンの棧橋で警官に追いつめられて自殺した渡政の労農葬を行なうことを決めたその準備中に、右翼に刺殺されたので、労農葬は渡政・山宣葬として行なわれることになったのです。

(三) 一〇五号から続く  
参加者の中には、無産党議員のほかに尾崎行雄、永井柳太郎など何人かの顔も見え、永井は「いやしくも代議士の告別式にこの警戒は何事だ」と叫んでいたと太田君は書いています。

国会での山宣の発言は「国賊」「赤魔」と罵られても、断固として階級的立場に立ち、日本共産党の指導をうけて、人民解放の正義の論陣をはりました。身を挺して最後は治安維持法の死刑法に反対して犠牲となった戦士の遺体は、

渡政・山宣労農葬が青山斎場で行なわれた三月十五日は、三・一五の一六〇〇人検挙から一年目の記念すべき日です。前記救援会の太田によると「司会者は救援新聞名義人玉井数馬。救援会を代表する弔辞は江口渙が受け持った」とあります。

さきの山宣葬のときは現職代議士山宣の葬儀であったので、弔辞は中止だが解散まではやりませんでした。しかし、渡政・山宣葬になると警戒はきわめて厳重で、参列者の一人ひとり身体検査をやりました。道端ならんだ会葬者のなかに、渡政のお母さんの渡辺テフさんが、河野さくらさんに付き添われて並んでいたのを僕はみえています。会場は超満員でしたが、無産党議員団を代表して弔意を表すためか西尾末広が出席していました。僕はどんな弔辞をのべるかと固唾をのんでいましたが、彼は一言もいわず、頭を下げて敬礼をしてさっさと退場しました。

葬儀が始まってから弔辞はすべて中止となり、「横暴」と抗議の声がおこると、ついに解散となつて大混乱となりました。警官隊は参列者ともみ合い、検束される人もできました。誰かが三・一五の歌をうたうと大合唱となりました。警官隊は一斉にとびかかっていきましたが、歌は消えませんでした。散りじりに帰りながら、歌声はつづきました。

三・一五うらみの日  
われらは、君に誓う  
党のために倒れたる  
きみ、渡政に誓う  
(きみ、山宣に誓う)  
流されし血潮もて  
大胆に復讐せん  
労働者農民は  
共産党を守る

三・一五の歌の最後の詩句は、  
労農党を守ると云う人もいたが、  
僕たち若者は共産党を守ると大胆

に歌いました。それは、山宣の思想にも一致すると思つたからです。検束がはじまる混乱のなかで、僕は江口渙夫妻と一緒に逃げました。外苑の入口で制服巡査二、三人に訊問されましたが、なんとなく突破しました。江口さんは「なんだ、葬式帰りに何を聞くことがあるんだ!」と例の調子でどなりつけるように叫びました。

渡政・山宣葬は公然とは発表しない新聞もありました。しかし、内部では知らせ、知られていました。山宣が暗殺された前日、三月四日大阪中央公会堂での全国農民組合全国大会での山宣の演説は、大きな反響を呼び、その影響もあって、全国的にも農民組合は山宣葬をおこない、彼の人民に捧げた生涯を偲んだのでした。とくに京都では、遺骨が京都駅につくと地元であり、東京以上の大衆動員となり、山宣葬はプロキノ京都支部が弾圧の中を奮闘して、記録写真として成功しました。この中に、東京本部から派遣されていたプロキノ京都支部に僕の友人上田勇がいます。

渡政・山宣労農葬は、絶対主義的天皇制下の狂暴な本質を大衆に暴露することになりました。解放斗争の戦士を惨殺するだけではもの足りず、犠牲者を弔うこともそ

(太田慶太郎著 『私の歩んだ道』の写真から複製)



山宣告別式(上段右より大山郁夫、太田慶太郎。下段、河上肇)

の泥靴の下に蹂躪したのです。しかし「歴史にそむく潮流に未来はない」(宮本顕治)のです。山宣惨殺後六五年の歴史は、軍事的、警察的天皇制の崩壊を、それを支えてきた治安維持法体制の醜い瓦解を、日本人民の前に、世界の民主勢力の目前に暴露したのです。

「日本共産党創立以来の七一年の歳月は波乱万丈に満ちたものであったが、何よりもわが党は、社会科学の力に依拠して歴史を切り開いてきた。多くの先輩や同僚の犠牲は貴重なものであったが、その歴史への貢献は不朽である」と宮本議長は党史論の現代的意義の

中で述べています。山宣もその中の一人として、平和と社会進歩の歴史に深く刻まれて偲ばれるでしょう。

#### (四)

山宣は敬虔なクリスチャンの長男として生まれ育ち、平民新聞、社会主義研究などに親しみ、カナダへ渡り各種の労働に従事し、日本領事館から危険人物の一人として登録されました。帰国して東大卒業後、人生のための科学に志し、二三年サンガー夫人の来日に際し「サンガー夫人家族制限法批判」を刊行し、また、アインシュタインと会見し、平和運動の真の担い手は労働者階級のほかにないと説きました。彼の産児制限運動は労働大衆の支持を受け、軍国主義的天皇支配に抵抗する市民的自由の運動として発展し、この運動のなかで公然と無産階級運動に身を投じたのです。

大阪労働学校及び京都労働学校の講師及び校長として、また各地の社会科学研究に関係を持ちました。二五年の学連事件では最初の治安維持法違反事件として関係したとし、同志社及び京都大学を追われたので各種の労働運動に指導員長になり、対支非干渉同盟の委

員長として警察に検束留置され、その渡航を阻止されました。

社会科学の研究は従兄の高倉テールからマルクス・レーニンの本を、また「資本論」も河上博士から原書を借りて読しました。「知は力」として山宣の場合人道主義的立場から労働者階級の立場へと発展し、理論とともに大衆運動の実践に立ったんです。侵略戦争に反対し、主権在民のための運動はいまこそもっとも必要とされることを理論的にも政治的にも把握していました。日本共産党の推薦の国會議員として自ら「私は共産党正統系の唯一の議員とし反動の十字火の中心にいた」「いつ殺されるかも知れぬ」と覚悟して階級的、党的立場を貫いてきたのです。

五六議会に対する党方針と、彼が労働農民新聞にのせた議会斗争方針の一致は偶然ではありません。ここには日本共産党との思想的、組織的一致が見いだされます。治安維持法の死刑法改悪に反対する草稿を書き上げ、日本共産党中央委員会の同意を得たのち、辛苦をともした大山郁夫に向かつて打ち明けて云う、題目だけ列記すると、第一「治安維持法改悪反対」前衛虐殺法反対。第二には日本共産党の階級の本質を明らかにし、日本共産党こそは、日本無産

階級のもつ唯一の政党である、労働者階級の革命的政党であるでした。

告別式場は超満員で街頭に溢れていました。座長に大山郁夫、太田慶太郎が進行係として机に並んで座り、そのすぐ下に河上肇の横顔がみえます。その座長席を見えないように、制服巡査が頸紐をかけて立っています。衆議院議長の簡単な型通りの弔辞をのぞいて、各方面の弔辞は本富士警察署長によって全て中止を食って、そのたびごと怒号と罵声がおこり、昂揚した戦斗的な雰囲気の中で葬儀は進行しましたが、警察はさすがに解散をくわせることはできませんでした。

(五) 山宣が生命を賭してたたかった主義主張は反動勢力の卑劣な白テロによっても後退するものではありませんでしたが、これは大きな嵐の前ぶれでした。一九二九年四月一六日を中心に全国的に党と支持者に対する一千名におよぶ一斉検挙がおこなわれ、不屈の革命家市川正一らもつづいて検挙されました。三・一五と四・一六および中間検挙で、第三回党大会でえらばれた渡政、市正、国領らの党中央委員および主な活動家、経験ある指導者のほとんどが奪わ

れました。それは日本の革命運動に経験を蓄積した指導をつづけることを妨げ指導の系統性が欠け、深い痛手をこうむりました。

しかし党は新しい活動家によって補充され侵略戦争反対、平和と民主主義、主権在民のスローガンをかかげて被圧迫人民の先頭に立ってたたかうことをやめませんでした。

### むすび

①山宣は貧しい者、虐げられた人々に心からの愛情をもってその人々の利益のために先頭にたつてたたかい、倦むことを知りませんでした。そこから人間愛と世界的視野で教養をひろめ科学的社会主義を自己の血肉としたのです。

②日本共産党のテーゼと方針を誠実に実践し、後退することはありませんでした。その活動を通じて自らの思想をきたえ、発展させ、人は何のために生きるかの目的を自覚し、大衆につよい影響をおよぼしたのです。

③山宣は帝国議会の活動は決して長いものではなかったが「国賊、赤魔、馬鹿野郎」と下劣な怒号にもひるむことなく、歴史をつくるのは人民大衆だと確信し、いのちがけで、勇気をもってたたかったのです。これこそ革命的人間像でな

くてなんでありましようか。

山宣没後六五年、三・一五、四・一六の大弾圧の六五年を記念するつどいにあたり、日本共産党は不滅であることを歴史はいきいきと国民に示しています。

日本共産党と日本の勤労人民は、山宣ひとりだけに赤旗を守らせなかったのです。山宣の柩は若い肩にも重かったが、その後の日本と世界の歴史はさらに複雑深刻で波乱多きものでありました。しかし歴史の弁証法は、敗北したのは科学的社会主義ではなく、日本人と日本共産党でもなく、絶対主義的天皇制であり、歴史にそむいた体制とその追隨者でありました。われわれはこんにちほこりをもって党の七十年史を語ることができるのです。僕たちは、侵略戦争と治安維持法の犠牲者の体験を風化させないために、暗黒政治を再びゆるさないために、決意をかためたたかっています。

いまや革新の党は唯ひとつ日本共産党だけです。平和と社会進歩のため、日本共産党を先頭に幾百万大衆は、日米反動体制に徐々にかつ速度をはやめて重圧を加えています。

戦後、僕は何回か山宣の墓碑に同志らとともにまいり、長男である山本英治さんとも挨拶をかわ

し、山宣の業績についても話しあいました。再びその墓を石膏で塗りつぶされないためにも、平和と国民主権のために活動しましょうと――。

くしくもその父の命日、本年三月に亡くなられた長女の山本治子さんの歌があります。

○死してなお滅びぬひとの志

雄々しかりしを今にしておもう  
この短歌を御紹介して山宣の柩をかつきその火をつぐものとして追悼をこめた挨拶をおわります。

### 参考書

「日本共産党の六十五年」

日本共産党中央委員会

「山本宣治全集第五巻」 汐文社

「私の歩んだ道」 太田慶太郎

「戦旗」一九二九年四月号

戦旗社

「日本共産党の六十年京都府版」

日本共産党中央委員会

「目でみる京都の民主運動史」

かもがわ出版

「山宣」西口克己小説集

新日本出版

(えびすだに・はるまつ

日本共産党名誉幹部会員)

## 戦後五〇年

## 満蒙開拓義勇軍を語る (二)

谷口茂雄

(4) こいつ死んでいる

東京城の収容所の生活は、実にもあてられないものでした。毎日毎日、ロシア兵は一人一人の員数を点検していました。カケ算が出来ません。教育程度が悪かったのでしょうか、本当にしんきくさいものでした。

人間、栄養失調になると黒くなっていくのです。勿論、汗とほこりでアカがついて黒くなるのは当然ですが、それ以上に皮膚が黒ずんでいきます。よれよれの服、髪はバサバサ、体はやせ細って、まるで幽霊のようなものです。

十月の中頃でしたから零下二〇度。腹はへるし外は凍でパンパンです。私はやせ細って、腕も親指と人差指でつかむとピツタリ一まわりします。筋肉はまったくなくなり皮だけです。

皆んなが餓鬼のようになって食

物の話しばかり、私も田舎の母親が作ってくれたボタモチの話をしました。「重たいような、大きなボタモチを、あついうちにコッチリとアンコをつけて、指の間から落ちるようなものをフウフウと吹いてたべるのだ……」こうして、食物はなくても、話ただけで食物をたべたと想像していたのです。

ある日の朝、寝床をかたづけようとしたら一人の男が動かないのです。

「あ、こいつ死んでる」

「夕べ、たき火の所へ、たき物をもって来て『一寸あたらして下さい』といていた子だ」

皮膚が黒くなって、たき火の火がバアッと顔を照らすと、えり首から肩にかけてザアと風が一杯はっているのです。皆んなが「お前、風を取らなあかんぜ……」といていたんです。風は人間の

死期が近づいて体温が下がると、ぞろぞろはい出てくるのでしょうか。

「可哀想に起こしても起きない。つめたくなっている。そんなら皆んなで埋めてやるう」というので、死人を担架にのせ、私が前棒をかつぎ、後にやせぼー氏。その横が青ぶくれ氏……六人してかつぎました。ところが、こちらも体力消耗で足もふらふらです。兵舎の階段を降りようとしたとき、荷が前にかかり、私は前につんのめってドターとたおれました。したら、とたんに皆んなが倒れてしまい、死人はほうり出されました。死人は三〇キロもあったかかったかですが、六人で担いでもたおれるのです。又それをひろって、かつぎました。先に二人を穴掘りにやりましたのですが、凍がきつくて土が足りません。山形県出身の子が死んだ時は、九月でまだ土が掘れたのですが、今度は凍って掘れないのです。墓場は、一人一人まるで棒鱈を横に並べた様にして、多くの死人が埋めてあるのです。土が足らんので、鼻が出た腕が出たりしています。私等も寒うて寒うて辛抱が出来ません。それでも「カン」をしておこうといつて、手をあわせて帰りました。私等は次に移りましたが、あと

で聞きましたが、春になって収容所の人が埋め直して呉れた様でした。おそろく今でも遺骨がそこらに散らばっているのではないのでしょうか。オオカミや狐のえさになってしまったかも知れません。これが私等の「葬式」です。いつぞやの天皇の葬式とはえらい違います。

とにかく収容所は、この世のものとは思われない悲惨なものでした。

私達より一年先輩の義勇軍は、現地召集がかかって関東軍の兵隊にとられました。それらの人々はシベリヤ送りになり、極寒の地で強制労働をさせられたのです。

私等は子供でしたから解除になったのです。

そして私達は、日本へ帰れるかもしれないと思えました。延吉から阿加、そしてハルピンに向け南下したのです。

私等は東京城の収容所から出たのですが、阿加のあたりで一行とバラバラになってしまいました。

私はハルピン駅に単独到着しましたが、ハルピン市は丁度正月、旧正月を祝っていました。私は腹がへるので、とある町角のセンベイ屋の屋台でセンベイを買おうと行きました。その時、どうやら日

本人のおばさんらしき人がいます  
て

「あなたは日本人か」  
と聞くのです。

「私は勃利の開拓義勇軍にいま  
した」  
という

ハルピンの太平区で働きなさい  
と行って呉れました。私はあまり  
のなつかしさに涙が出ました。は  
じめてやさしい言葉をかけてくれ  
たおばさんは、まるで母親に出あ  
ったようでした。本当に地獄に佛  
でした。

そのおばさんは東北なまりのあ  
る人でしたが、私はその人の言う  
とおりハルピンの太平区の満人の  
家に引き取られました。

その家は石うすを馬に引かして  
粉引きをしている製粉業をやって  
いる家でした。私はここで一生懸  
命働きました。時々、ロシア人の  
肉屋に手伝いにいたり、キャン  
デーやタバコ売りなどもしたこと  
がありました。酷くおとろえて  
いた体も大部回復するようになり  
ました。

製粉屋の主人は  
「お前は日本人で日本語が聞き  
るし、中国語の通訳をやれ」  
といわれましたが、私は日本に帰  
りたくてたまらない。大家の奥さ  
んは

「やはり日本に母親がいるのだ  
から、帰してやっては…」

と行って呉れました。その時、千  
円程くれたと思います。日本人の  
子供は、あれは百円やった、いや  
五百円やったと、売り買いされて  
いました。

私は六人程の日本人と共に、救  
済本部にいき、帰国の申請をしま  
した。そして何日か待っているう  
ちに、八月三十一日「本部へこ  
い」という通知が来ました。

日本人の映画館があった所に青  
葉収容所というのがあり、ここで  
また半月ばかり引揚げをまっつい  
たのです。この地方は八路軍の管  
理下でした。私達が引揚げるときま  
り、ハルピンから長春(旧新  
京)、そして奉天につくと、今度  
は蒋介石の国府軍の管理下に入り  
ました。

長春から無蓋車にゆられ、ドン  
ゴロスをかぶって南下したので  
す。奉天につくと、私達は頭から  
白い粉をかぶせられました。とう  
とう虱が一匹もいなくなりました  
。今のDDTだったのでしょ  
う。長の虱よサヨウナラです。本  
当に嬉しいことでした。

〇 「日本が見えた」

昭和二十一年(一九四六年)八月

にハルピンをたつて、私達は、奉  
天、そこから中国行きの汽車で港  
町コロ島につきました。東支那海  
の港町です。

ここで私達は日本への船をまち  
ました。ようやくアメリカの上陸  
用舟艇のような、前がガバーとあ  
く船がきて、日本人の引揚げ者千  
人程が乗り込みました。

鉄板の上にアンペラをしいて、  
その上に寝たのです。左舷に旅順  
港の塔が見えました。このあたり  
は波が静かでしたが、玄界灘は荒  
れました。そして、船は福岡の博  
多港に向かっています。ところが  
が、船に伝染病が出たというの  
で、佐世保に廻りました。この時  
はじめて、船員たちが私達の為に  
慰労会をやってくれて、

『リングの歌』

を歌ってくれました。女の子た  
ちは直ぐにこの歌をおぼえまし  
た。船は佐世保沖に碇泊したので  
すが、又もや病気が出たというて  
降してくれませんか。

天草出身のおばさんが乗ってい  
ました。

「日本の陸地が見えたア…」  
と叫びました。五島列島がその横  
にあります。海から見ると、五つ  
の島が一列にきれいに並んで見え  
ます。

みんなあまりのなつかしさに船

の片方により過ぎて、船がかたむ  
いてしまいました。

「バランスをとれ」

と命令されて船は元にもどりま  
したが、ついで長崎の火が見えて  
きました。それでも降してくれま  
せん。とうとう豊後半島をいまわ  
りして、船は瀬戸内海を北上し広  
島県の大竹についたのです。途  
中、風波がきつく難破船にも出あ  
いしましたが、私達はとうとう三年  
半振りに祖国日本の土地をふんだ  
のでした。

丁度大竹には海軍の兵舎があ  
り、そこで海軍の作業服のような  
ものを支給され、中国でのボロ服  
と着がえることが出来たのです。

私達は汽車にのり、原爆の落と  
された広島を通過したのでした  
が、夜中のことで何も見えません  
でした。そして京都につき、山陰  
線にのりかえて、なつかしの殿田  
駅についたのです。

殿田駅は一つもかわっていませ  
んでした。小学校で一年先輩の天  
若の吉田龍一君が郵便局に勤めて  
いて、通送の荷をとりホームに  
出てきました。

「今、満州から帰ってきた」  
と挨拶すると

「ほう……」

ビックリした様な顔をしていま  
した。





丁度十月二十一日午前十一時頃  
でした。

私は家族にも友人にも何一つ連  
絡することなく、突然に郷里に帰  
りついたので。私は殿田から天  
若に向けてあるきました。荷物と  
ては何もありません。着のみ着の  
ままです。途中出あった人に私が  
一番初めに言った言葉は、

「うちはあるやろか」

ということでした。私はどこも  
ふり向かず、一目散に我が家にか  
け込みました。

「お婆、今もどったぜ!!」

家の中には、母は田圃に出てい  
ておらず、お婆がおりましたが、  
「お……」というままで泣いて  
しまいました。私も

「お婆……」

といったままでポロポロと泣きま  
した。近所の人

「茂ちゃんが帰らはったぜ!」  
と母を呼びにいてくれました。  
母親はあわてて帰って来て、あ

まりあわてたので、つまずいて生  
爪をはがしてしまいました。よほ  
ど嬉しかったのでしよう。

(ウ)「お前だれやったいのう」

私は丁度十八才でした。小学校  
の井尻幸一先生に言われて満州に  
いき、三年半の間、生死の淵をさ  
まよい、とうとう九死に一生を得  
て帰ってきました。

が、多くの人々が死んでいきま  
した。世木小学校の同級生で一緒  
に行った湯浅悦治君は、向うで死  
んでしまいました。幸いもう一人  
の同級生山内健一君は、生きなが  
らえて帰って来ました。

悦治君の死亡陳述書をつくっ  
て、京都の堀本義一さんに証明し  
てもらい、日吉町役場に提出して  
やりました。しかし、兵隊とちが  
って義勇軍は何んの補償もありま  
せん。雀の涙程の給付金が一寸出  
ただけです。

私は思うのですが、戦前  
の軍国主義教育で満州は日  
本の生命線「十町歩の土地  
をやるから」とのふれ込み  
は完全にうそでした。それ  
は、向うの国民の耕作をし  
ていた土地を取りあげるこ  
とだったのです。これは、  
まぎれもない日本の侵略で

す。向うの国民を酷い目にあわし  
たのです。

今でも私は夢にみえます。油あせ  
が出来ます。私達は軍国主義教育に  
だまされていたのです。

先日、小学校の同級会がありま  
した。四十五年振りで生きのこっ  
たものが集まりました。大阪から  
井尻幸一先生も出席されました。  
そして先生が私を見て

「お前だれやったいのう」

「お前だれやったいのう、あったも  
のではない、私は先生に原稿をか  
いてもらって、満州の義勇軍にい  
った茂雄です」

私はなさけなくなりました。そ  
うきつくなじったわけではありません  
せんが、それ以来先生は同級会に  
こなくなりました。この先生もだ  
まされておられたのです。

戦後五〇年、私は今までに、口  
を開けば満蒙開拓義勇軍の話をし  
て来ました。しかし、それは部分  
的なものでした。今日は一気に全  
行程を話しました。まだまだ語り  
つくせてはいませんが、今の若い  
人々に聞いてほしいのです。二度  
とこの様なことをおこさない様  
にしなければならぬと思  
っています。

一九九五、一一、二九 談

あとがき

本編は、一九九五年一月二九  
日午後七時から十一時半まで神吉  
上区の谷口茂雄氏より聞き書きを  
したものです。

谷口氏は京都府船井郡世木村天若  
(今の日吉町)に生れ、十六才で  
満蒙開拓義勇軍に参加しました。

極寒の満州(今の中国東北部)で  
幾多の辛酸をなめ、九死に一生を  
得て帰国。

日本帝国主義がいかに非道な侵略  
を行い、まちがった軍国主義教育  
をやったか、この記録はその生き  
た貴重な証言となるものです。

私は本人の了解を得て、本誌に掲  
載するものです。

九五年十二月三日  
(湯浅貞夫記)

この談話をまとめられた湯浅貞  
夫氏は五月一六日に逝去されまし  
た。この文章は湯浅氏が生前に整  
理されたものです。

お願い

本誌は戦前・戦後の民主運動史にかかわった方がたの体験を記録する定期刊行物として、全国にもまれな存在です。民主運動のさらなる発展を願う立場に立ち、それらの貴重な体験を後代に伝えたいと思います。運動のうまくいった場合だけでなく、失敗もまた後者の戒めとなることは先人の説くところです。振るって原稿をお寄せ下さい。

なおのこりすくなくなられた戦前の活動家の記録だけでなく、戦後の運動史のかなりの部分が記憶から失せようとしています。戦後の運動史についての体験記も歓迎します。ただし掲載期日、順序は編集部におまかせ願います。

○ 投稿は三八〇〇字程度でほぼ一号に掲載されます。それ以上になると連載せざるをえなくなる場合があります。同じ号に連載物ばかりというのも具合が悪いので、なるだけ一度に掲載できる程度の投稿を希望します。しかし場合によっては割愛したい長文の貴重な記録もありますので、あくまで一般的な原則として御諒解下さい。

編集だより

○ 長年にわたって本誌の編集にあたられた湯浅貞夫氏は前号でお知らせした通り、五月一六日に逝去されました。七月二七日には京都府船井郡園部町国際交流センターで「湯浅貞夫氏を偲ぶ会」がもたれ、本会からも天野和夫、岩井忠熊、奥村和郎ほか多数が参列し、故人の業績と人柄をしのびつつ、冥福を祈った次第です。

○ 京都の今年の夏は格別に暑く、またO157中毒事件などもあり、身体・生活の不安がつづきました。ようやく季節も峠をこえ、京都の一番よい季節をむかえます。会員の皆様方の御自愛を切に祈ります。

○ それにしても最近の政治・社会の動向は、何としても腹立たしい限りです。沖縄県民の願いをふみにじり、国民の声にそむいて、最高裁は大田知事に代理署名を命じる判決を下しました。三権分立の原則の放棄という批判もあるように、まさに安保は政府の責任、最高裁は沖縄の苦しみはあづかり知らぬといわんばかりです。

自民党も社民党も消費税五パーセントへの値上げは当然。さきが

けは次の総選挙をにらんで内紛という有様。新進党にいたっては党首と有力幹部の言い分はバラバラで、一体どこに責任があるのかさえ分らない。TVに登壇する政治評論家さえ、一週間後の政局を予想

しえないほどのわけのわからぬ体たらくとなってしまう。置き去りにされているのが主権者の国民ということだけが、いやにはつきりみえてきます。

○ 折からアメリカでは大統領選挙のまっただ中、日本でも国会期中に解散があるかもしれないという話です。一連の異常な政治劇を見せられてきた国民が、今度こそは主権者の自覚に目ざめて立ち上る時が来るといえましよう。

四〇〇〇票差までせまった今年の京都市長選挙での、無所属と共産党の共同候補井上吉郎氏の奮闘をささえた市民の、もう一步の前進が期待されます。さらにまたこの勢を全国にひろげることが大きな課題となってきたようです。

(岩井記)



会や本誌については、左記へご連絡ください。

〔事務局〕

〒六〇五

京都市東山区今熊  
野南日吉町三九

奥村和郎

TEL FAX  
〇七五

五六一七四八五